MCN経営漫談コラム　続・三々な経営/名言・諺シリーズ⑦「国際化の戦略」 Z-58

「ローマ」にまつわることわざ三句+α

企業経営漫談士　岡野実空

我がラスト(50)スパート7回目のテーマは、定本『ゼミナール経営学入門』第6章の「国際化の戦略」。長らく「グローバル化」に向かって進んでいた世界時計の針が逆転する中、今回は一気に「ローマ」時代まで遡り、そのマネジメントにまつわる諺を TPO(時・場所・場合)で取り上げます。

その1(T)：ローマは一日にして成らず

近代小説の祖・セルバンテスの傑作、『ドン・キホーテ』で世界に知られたラテンの格言。英語訳は、**“Rome was not built in a day.”** 狭い地域や領域の事業でも十分難儀であることを体験済みの皆さんには、海を越えた「大事業を成し遂げるのに、長い年月と労苦を要する」ことの解説は不要でしょう。

だからこそ大事にしたいのは、いまだにそんな『見果てぬ夢』をもつミドルたち。若かりし頃の荒唐無稽なものとは違い、現実という厳しいフィルターを潜り抜けたその多くは、社会的に『価値ある夢』。またその実現を後押しする仕組みが内外の多くの人たちを惹きつけ、その「求心力」が核となって、組織の存続と発展につながるのです。

その2(P)：すべての道はローマに通ず

前回コラム「企業構造の再編成」で加工転用した、19 世紀フランスの詩人、ラ=フォンテーヌの名言。英語訳は、**“All roads lead to Rome.”** この奥深い言葉は、「目的/手段」や「集中/分散」、さらには「真実/事実」に至るまで、さまざまな場面で比喩として使われ続けています。

近代の科学技術なき時代、一集落に過ぎなかったローマが、都市から半島国家に発展し、地中海周辺からその北部へ拡大した理由や道程は、「国際化の戦略」そのもの。またそれに「道路」が果たした役割を考えることは、その基礎となる「要素」とそれらの「相関」を確認することに他なりません。

さてそれに関し定本は、「経済」「政治」というマクロから、「経営資源」のポートフォリオやそのジレンマというミクロの視点に論を展開しています。しかし「国際化」というテーマの性格上、そこには「地政学」「軍事学」などの視点が不足しています。

そのため今後の続編では、まずその部分を私が補足した後、「国際経験」豊かな第 2 走(筆)者が、その他の「要素」を加筆していく予定です。

☞ 『三々な経営』
- 1-1 「大変」な時代
- 1-2 「グローバル化」を考える
- Z-50 「具体⇄抽象」PJ 報告⑩

☞ 『四字熟語』で考える経営戦略
- Y-02「外部環境」を考える・その 1

その3(O)：郷に入っては郷に従え

この格言は、中国由来の禅語が日本語化したもの。その内容の重要性と汎用性は、同じ趣旨の諺が多くの言語に存在していることからも分かります。因みに英語版は、**“When in Rome, do as Romans do.”**(オリジナルはもちろんラテン語)

かつて「ローマ」が発展する中、一貫して保たれたのは、各地域に根づいた風習や宗教などに関する「寛容性」。それは自分たちにない考え方や物事、ときには人までを受け入れ、その中で優れたものをさらに改善して広く社会に普及させるという、「公」の意識に基づいた正しい「模倣」でした。

しかしその後、「ローマ」帝国の後継者をもって任じた国々のリーダーたちは、その肝心な精神と行動を一切無視。最新の科学技術を駆使して「暴力」を奮い、世界中の「植民地」からの収奪で、自国の繁栄だけを目指したのです。

さて 21 世紀のいま、私たちが考える「国際化の戦略」は、かつての「ローマ」が目指していた「グローバル化」を、「暴力」や「奴隷」ではなく、「情報」や「知識」によって達成する前段でなくてはなりません。そのためには清濁併せ呑みつつ、虚心坦懐に「ローマ史」を学び直すことにしましょう。

その意義を説く有名な諺の大本は、ローマの歴史家クルティウス・ルフスによるもの。
歴史は繰り返す！　**History repeats itself.**

2022年3月21日　実空

©NPO マネジメント共育ネットワーク